

生死一如

— 桜花特別攻撃隊戦記（四） —

茨城県 長沼武治

前進基地鹿屋

基地に着いて、はからずも小学校からの学友・槍友（免許二段）で、私より早く志願をした野口一整曹に会った。私は一飛曹である。彼は私に、今からどうなんだと言う。私は彼に「明日は鹿屋から出撃だ、家へ、元気で死んで行つたと、後で知らせてくれ」と頼んだ。日の丸づくめの容姿に、目だけがギョロギョロ光っている無気味な様に、野口も聊か慌てたらしい。

「今夜一緒に飲もう、駅で待っている」という。このようなことで「出水」の夜が明けた。敵機のお出ましにならぬうちに出撃というので、朝薄暗い空について飛び立った。

未明の出発にも、野口は班員を連れて「帽振れ」の見送りに来てくれた。無事目的の鹿屋に着陸したのは六時ちよつと前であった。

前進基地鹿屋

私の愛機は「二十七号」と決まった。昨年十二月、美保空から転勤した初めての実戦部隊の基地である。新入隊の私には、夢中で過ごした基地であるが、半年前の状況とは全く変わっている基地の様相に哀れさを感じ、悲壮を感じた。何度かの爆撃を喰らい、また、いつ空襲に見舞われるかも知れない緊張感が、ひしひしと窺われるのである。

勿論、六カ月前の兵舎も無い。基地の西側にある野里小学校近くの土手につくられた防空壕の中を、一夜の罫ねぐさに指定された。何かの都合で出撃の予定が延びた。私は、自分のペアを集めて、飛行場の片隅で出撃時の打ち合わせを行った。

何分にも急遽狩り出された替え玉操縦員で、ペ

アを組んで飛行訓練をしたことはこれまでにない。顔合わせの会合である。私は常にこれまでの戦訓を見、そして、これを最後の目的に生かす方法を語ったのである。

打ち合わせというより、私の思索を述べたのである。偵察員山下機長も黙って頷いて聞いてくれた。ペアの皆も黙って神妙に聞いていた。

一機一艦轟沈の戦果が軍艦マーチと共に、今出撃前の我が耳朶に聞こえてくる気がする。さて、その内容を挙げてみる。

- 一 我が母機一式陸攻M2の性能の熟知。
- 二 燃料搭載量に対する飛行時間及び飛行距離。
- 三 攻撃コースの決定。
- 四 見張り分担区分。
- 五 今までの成功、不成功の比較。
- 六 成功後の行動、対策。
- 七 出発順位は一番になる。

以上のことをよく喋べった。要するに、我が一式母機は、二トン以上の重量の子供「桜花機」を、かかえて飛行する場合、一メートル秒の上昇率で沖繩に向かう。その場合の気速は一〇〇ノットであり、ちょうど目的地に着いた頃は、所定の高度をやっと保持する五〇〇〇メートル位である。そのため、沖繩列島線上には、敵戦闘機が数団も待ち伏せていることは戦訓で明らかである。戦果を焦ってこの中に突っ込んで行くことは、飛んで火に入る夏の虫同然である。

明日の攻撃には我がペアは、これを避け、迂回してこの線上を飛ぶ（機長がチャートに航路を記入する）。しかし、限られた燃料のため、燃料の増し積みが必要である。この燃料の不足分は私が交渉する（当時は既に特攻の燃料すら規制しなければならぬ程の状況にあった）。

見張り区分は、操縦員の主操が右前方一円、副操、左前方一円、攻撃員後方、塔整員左方、電操員右方、電信員上方、偵察員は前方下方一円、と

言うように決める。耳による他機の察知は、愛機の爆音でできない。頼りは眼だけである。

相對速度によるスピードは倍以上であるから、早く他機を発見することが大切である。敵機か、友軍機か判別できるようになってからの発見は手遅れである。「目的達成後は、笑つて愛機と共に敵艦に突入する」以上のようなことを、ペアの皆に話した。そして、その晩、私の受持ち仕事である燃料の追加搭載を交渉に整備分隊に出かけた。整備班長に自分の愛機「二十七号」であることを告げ、ドラム缶三本の増し積みに成功した。

子供機の「桜花隊員」は、梓弓矢であった。矢は放たれれば再び戻ることは絶対にない。しかし、母機の乗員は、再び戻ることもできるかも知れない、九死に一生の望みがないではないという。そのため母機の我々は特攻隊員と呼称されない。

ではあるが、我々ペアは申し合わせて、再び帰

らぬと、覚悟ができていた。何も恐れぬ心構えに整備長も、ドラム缶三本の追加搭載を余儀なく承諾したのであろう。

沖繩の偵察状況により出撃がまた一日延びた。その翌日は休養であった。外出が許されて、当直将校から、次のような訓示があった。

「軍の機密を漏らさぬよう、また、ご先祖様の所へ行つて、汚い所に行つて来たなど言われぬよう。浩然の気を養つて来い」と。遊んでこいと言うのか、遊んでいかんと言うのか、月並みの訓示。お役目ご苦労に、我々を送った。そうした外出の折にも、夕闇迫る基地から、艦爆、艦攻の友軍機が、次から次から爆装をして離陸して行く。一旦地面を離れば、成功、不成功を問わず、一卷の終わりなのである。出撃を待つ自分でありながら何故か涙が出て仕方がない。ただ「成功を祈る」だけしか言えないお互いなのである。

当直将校の、おっしゃる通り、酒を飲むだけの

味気ない鹿屋の最後の外出は、正規の時間に帰隊した。五月二十四日の明け方であった。

出撃前夜

こと、ここに至っては、何もすることは無い。

今日は朝から休養である。防空壕の中でペアの連中とトランプに興じていた。遺書も書いた。幸い、桜井中尉が土浦出身で要務士官であったので、遺書の投函をお願いした。

色々長い文句の手紙を書いた。二十四日の外出は許されなかった。「明朝、〇五〇〇準備のできた者から発進せよ、出撃員の身の廻りは、残った者が面倒を見よ、明朝の弁当食事中番は、出撃員以外の者で行え」との連絡があった。「当たり前だ、明日から神様ではないか」と思いながら、その連絡を聞いていた。相変わらず、夜ともなれば、壕内で酒を飲む、歌を唄う。しかし、今日は、いつもより早く、十時で切り上げた。

明朝、四時の総員起しに遅れをとっては一生の

恥となる。まして、一番機を狙う私の考えである。その晩、飛行服を着たままのベッド入りであった。私は、グッスリ安眠を食った。

愈々出撃

二十五日、朝の総員起しは、今までの勇ましい号令とは違って、静かな、労るようにも聞こえたが、号令に違いはない。私は跳び起きた。そして指揮所である野里小学校の庭に集合した。まだ暗い校庭に、ゴソゴソ、モソモソ隊員が集まる。

「天珠岡村一家駐屯所」と書いた看板がある。その前に号令台があり、人の顔も判らぬ暗がり、名を呼びあつて各ペア毎の整列をする。先日、小松基地から転出して来た我々と、基地に残っていた五機を交えた出撃機十一機の搭乗割の黒板が、号令台の斜め後に書き出してある。私は、五機の中の一機「二十七号」に搭乗する訳だ（部隊史には十二機とある）。

搭乗書確認のため、近寄って見る。我が母機に乗る子機「桜花」の搭乗員の名を見る。岡本と出ている。序に桜花隊員である私の知る人はいないかと探したらいた。かつて美保空で教員助手をし、同じ釜の飯を食った丙飛仲間の徳安一飛曹がいるではないか。

「徳安兵曹！ 暫く」

「おお、長沼暫くだな」

「俺、二十七号だ、俺の飛行機に乗らんか」

「搭乗割を変える訳にはいかんだろう」

「岡本と交替して貰ったらどうかかな」

「それはできんだろう」そんな会話を交わしていた。また、誰の母機に乗ったところで、還れるものではなし、その先の話はやめた。

徳安春海は二十歳、白いマフラーからのぞいた顔は、女かと思まごう程の色白の美男子、優しい男だった。この徳安は、私の同期生の田村の操縦する母機の子供として、親子共に遂に還らなかつた。生還した私にしてみれば、あの時、ペアの交

替していたらと思つたが、そのため岡本が還らなかつたとなると、徳安も一生心苦しい思いをしただろうなどと、軍隊の「運隊」なる所以だと考えた。

戦後、岡本文明は、四国高知からわざわざ私を訪ねて来られ、当時を回顧談したことがあるが、「長沼は命の恩人だもなあ」と言つたことが、実感であつたろう。それは、今から出撃し、苦闘し還るまでの状況によつてなるほどと判る事実である。

司令、岡村春基大佐から攻撃命令が出る。

「鹿良間列島周辺の敵艦船を撃滅せよ。お前達の命は、私が貰つた。私もお前達ばかりはやりはせん。必ず後から行く。皇国の存亡まさに諸君の双肩にかかつている。折角の成功を祈る」

命令訓示が済んで、皆、クモの子を散らしたように別れ、用意のトラックに分乗する。人の顔も、誰と分かる明るさになつて来た。

久藤中尉や田村が

「長沼、しっかりやれよ！」と励ましてくれる。

「うーん、大丈夫」私は、別に新たな感激も、悲壮感も湧かぬまま応答した。久藤中尉と、田村は徳安を連れて行くのだ、余り興奮している様子に顔を見たら真っ赤だった。

愛機二十七号は、徹夜の整備にすでにエンジンはかけられ、担当整備員が「整備完了、異状なし」を告げてくれた。

双発のエンジン、そして胴体には「桜花」の子供が、しっかりと抱き抱えられている。初めて私の胸は高鳴る。「私も、この腕一本でこの大きい母機一式に子供まで連れて行けるんだ」と、自分で自分の誇らしさを改めて感激したのだった。

「おーい、しっかり頼むぞ！」

「頑張れよ！」

「お土産、頼むぞ！」

その声に皆笑って答えて機上の人となる。誰よりも早く進発したい、と心掛けながらも、一応の機内の点検、エンジンの調子等をチェックし、出発するのが建前である。整備員の御苦労には常に感謝し、絶対に信頼しているが、今日の出撃には特別である。「すべて異状なし」を確認する。

副操が車輪止めを取る合図に天蓋を開け、両手を前に挙げてひらく、整備兵が二人左右の車輪止めを外す。我が機は滑り出した。愈々発動！副操曾田兵曹の手信号で、滑走路に誘導される。各機共、そちこちの掩体壕に分散してあるので、誘導路を走行する間に、滑走路に近い一番機が私の前に出た。

「畜生！先陣をしてやられた」と口惜しく思った。私は、二番目の発進となってしまった。

時、正に五時五分、今までの私の総飛行時間は九七五時間であるが、今日の飛行時間を入れても一〇〇〇時間に満たない若輩パイロットである。

それが、最大重量の離陸発進をする。慎重に操作を心掛け、特に離陸直後の失速に用心した。地面を離れると同時に機首を少し押さえ目にして、充分の機速を持つて上昇の姿勢に入る。地上では、例の如く見送りの隊員が、旗を振り帽子を振っている様子を頭に書きながら「必敵轟沈」の意欲に燃えて懸命の離陸である。

発進時、二本のロケットを噴射し滑走を容易にする仕組みであったが、幸い、これを使用せず離陸することができた。このロケットは胴体の左右両側後部にあり、操縦席でレバーを引くことによつて噴射するが、左右同時のレバー操作が困難なため、間違えば機首が右、または左に振れて、離陸をかえつて危うくする厄介なものである。噴射時間は二、三秒位なもので滑走距離を短縮する。瞬間推進装置と思えばいい。

「桜花」だけでも過重と思われるのに、このロケットがまた重い。この取付け作業をしたことがあるが、実験したことがない。何故、こんなもの

をと思った。こんな余計なものを考えず、離陸可能な飛行場を使えばいいのではないか、機械的技術ばかりが、必ずしも良い結果を生むとは考えられない。

後続の僚機を頭に書きながら、私は一路南の空を目指して上昇する。機速一〇〇ノット、一メートル秒の上昇率である。左右エンジンを同調させると、あのやかましい爆音も、気持ち良い子守歌にも聞こえるのである。今までの巡航一六〇ノットに比べると、じれつたい思いの飛行ではあるが仕方がない。

積んで貰った弁当は、出撃員だけしかお目にかかれぬ主計科念入りの銀飯（米だけの）寿司である。折角の御馳走も食わずじまいでは勿体ない。食い辛抱の私は、これを食うことにした。「おいしい、みんな弁当を食べろ」と言った。ちょうど季節の果実、九州名物の枇杷等も、ランプ箱いっぱい積んである。弁当は曾田と交替できれいに頂

いた。今から、二、三時間で、男の中の男と贅えられ、悠久の死を信じている私であった。

今、ここで飯も美味しく平らげるあたり、普段と何等変わらぬ気持ちであった自分が、今でも不思議に思えるのである。南富士と言われる開聞岳が奇麗な姿で前方下方に、浮かんだ頃、夜が明けて来た。いい天気だ。今日の成功間違いなし、見敵必殺の意欲に心は躍る。

「覆水盆に還らず、離陸機基地に還らず、されど我らお盆に帰ろう」などと考えて、悠々たる心境。慎重な操縦操作に九州を後にして南下する。

途中機長の指示により偏流測定のため、九十度左変針、しかる後、所定の針路設定「ヨ一ソロ」。

各自、見張りを厳重にするよう呼び掛けた。敵機が友軍機かの判別がつかないからでは遅いと、出撃前に言っている。眼はまるで鷹である。

離陸後、どの位の時間が経ったであろうか、前方に白い雲が浮かんで来た。綿飴を大きくしたよ

うな形の雲が二つ、三つと、右から左へ、そして、こちらへ向かって来る感じである。

その雲の中に……と、それこそ、胡麻粒程の機影を確認した。私の眼は良かった（左右二・〇）勿論、敵とも味方とも判らないが、前方右から左へ、雲の流れに乗っているように見えた。私は咄嗟に怒鳴った。

「オーイ、敵機だ！ 敵機だ！ 退避する」言うなり高度を下げスピードを増した。その時、高度は三五〇〇〜四〇〇〇メートルであった。

せっかく高度をとって来たのにも思いつながらも仕方がない。幸いに前方の白い雲は、我が愛機に接近し、かつふくれ上がってきた。

「シメタ」と思って、その雲に包まれたら機外は真っ白で何も見えない。高度は二三〇〇メートルで、今から高度の挽回も容易でないと思った。

まず、計器飛行を試みたが自信がない。長距離計器飛行など経験もない。見張りこそ要らないが、自信のない飛行もできない。前の七号作戦で基地

移動の時は、太田の副で、彼に頑張つて貰い、小串の海岸へ不時着した苦い経験で懲りている。

そのため、早く雲から出たいと焦っているが、雲はますます厚くなるばかりか、雨も混じつてきた。どうやら、南方特有のスコールの中に入ってしまったらしい。風が、暴風ガラスに斜めに叩きつける。座席を下げてじつと我慢の計器飛行、しかし、十分ともたない。

私は自操（自動操縦装置）を使つてやろうと思ひ、その切り換えをした。手操、自操の目盛をよく合わすべきなのにその余裕さえ失っていた。切り換えと同時に愛機はグラグラと凄い振動を起した。一瞬ハツと慌てたが、直ぐ平常に戻つてくれた。お陰で、釦一つの操作で、上昇、降下、針路の修正ができる状態となつた。

この調子だと慶良間列島到着までは苦にならなひ。鼻歌まじりの飛行を続ける。外界は真っ白な雲と雨、その雨が遮風（防風）板に斜めに叩きつ

ける。ややもすると、斜めの雨が水平線と錯覚を起すこともある。自操の計器を信用して、なるべく、外界を見ないようにし、偵察員山下機長の指示する針路に「ヨーソロ」と飛行する。

今更、天候不良だから基地に引き返すことも、未練がましくできない。友の十機は帰投したにせよ、成功はこんな時にこそ得られるかも知れぬ。虎穴に入らずんば虎児を得ずだ。

征け！ 征け！ 愛機、獲物を求めて

見張りの必要なスコール雲中の飛行なので、「桜花」搭乗員岡本文明兵曹を見る。彼は既に特進して士官になっている。それにしても寝姿の大膽な彼である。離陸直後から眠り始めて、退避運動の急激な飛行にも、先刻の自操への切り換えの震動にも、全然目を覚まさない。

昨日あたり余程いい所へ出掛けたのかな？ と勘ぐつたり、死を目前にして、眠り続けるその姿に、ただ恐れ入つたり、「生死一如」の手本であ

ると感服したりもした。自分もその中に居ることを忘れて。

約二時間余り飛行したあたりで、機長が、「九十度変針、ヨーソロ」と伝えて来た。高度はやつと五〇〇メートルになったろうか、今までずっと上昇飛行で機速一〇〇ノットを保持して来たのである。岡本兵曹をゆり起す。

「長沼兵曹行きます。後を頼みます」

「しつかり頼むぞ！ お前が成功すれば俺達も後から行くからな」

私達のペアが後から行く約束をしてあることは、彼は知らない。固い握手を交わした。

それから十分程して突然機内は真っ白なガスに包まれた。私は「やられた！」と瞬間吃驚して後席を振り返って見た。塔整員の野口幸一飛曹が、炭酸ガスビンを持って笑っている。

「おい！ どうしたのだ！」彼はいよいよ戦場到達なので、今まで使用した燃料タンク内の瓦斯を吹き込んで、気化したガソリンの爆発防止作

業をしたのだと説明してくれた。なるほど思つて胸を撫で下ろした。

岡本兵曹は「桜花機」へ乗り移った。彼から「準備よろしい」と連絡があつた。そして機長から「戦場到着五分前、皆笑つて死ぬぞ！」と。いよいよか、常に温順しい機長も、実に立派な発声で宣した。さすがである。

皆「OK！」と笑えた。それで私も一度笑いの練習を試してみた。何だかうまく笑えない。両頬がこわばっているのを覚える。曾田を見る。曾田も私を見る。笑つてはいるのだが、この笑いは本当の笑いに見えるだろうか。

雨はしのかつ程に、防風ガラスを叩く。外界は何も見えない。手足を離れた操舵はひとりで、ピクピク動いている。多少高度を下げれば何かの目標がつかめるかも知れない。「高度を下げる」と降下の姿勢に入った。四〇〇〇—三〇〇〇—二〇〇〇—一八〇〇の時である。機長から「戦場到達！」の声である。鹿屋基地発進後二時間四十五

分の今である。と同時に敵対空砲火が、万雷のように打ち上げてきた。

手放している操縦桿、足踏み桿が今までピクピクだったものが、途端にガクガク揺れ出した相当な至近弾であろう。愛機の爆音など問題ではない。機外に雷のような爆発音が機の揺れと共に聞こえる。「やあ、来た来た」と言いながら、急いで自操のケツチをはずしたが、愛機はかえって揺れるばかり。

「桜花」の岡本から「飛行機をセットせんか！」と怒鳴つて来た。雲中飛行に自信のない私は、かえって危険な操縦となった。高度七〇〇メートルまで下げた。しかし、外は豪雨で何も見えない。視界零である。

私は「これはいけない」と思った。今、何も見えない。ここで「桜花」に搭乗員を乗せて投下することは忍びない。私は「桜花機のみ投下する。搭乗員を親機に移せ」と怒鳴った。愛機が踊り出す。岡本兵曹の親機に戻ったのを確認して、投下

機のスィッチを押す。落ちない。どうしたのだろう。二回、三回強く続けて押したが駄目。

愛機は、慌てた主の操縦にあげれ出した。飛行姿勢の修正が段々大きくなって行く。ままよと、咄嗟にまた自操に切り替えた。目盛の調整縦の線を合わせたつもりだったが、前回同様「ガラガラ、ガラン」と凄い震動を感じた。それでも一応自操に切り換えたが、この時の顔こそ一生に一度の私の真剣な顔であつたらうと思う。

これで大丈夫と操縦桿の内側にある把手を力いっぱい引いた。「桜花」投下器のスィッチが作動しない場合の補助装置である。無人「桜花」はストンと落ちた。愛機は二トン余の子供を産み落し、身重から解放され、グリーンと浮き上がった。

搭乗員の体がグツと床に押しつけられる。対空砲火は敵の電探射撃によるものだろうか、止めず万雷の響きである。これでは到底生還など思いもよらぬ。覚悟ではあるが、成功せずしてここでやられてたまるものかと塔整員、攻撃員、電探員が

ランプいっぱいに詰めこんだ電探欺瞞紙やらの銀紙（錫）を各銃座から投下している。

私はこうなったら機速を増して戦場脱出が第一
と思い、スロットルレバー全開し、高度を五〇〇、四〇〇、三〇〇と下げた。「桜花」攻撃時の
我が方の高度も敵は知っているらしい。それを低
空の、しかも拙い、躍りに躍つての飛行、これが
事実上は避待運動をした恰好となつて、敵の弾幕
を避けることができたのであつた。

とにかく、敵弾幕から逃れて我が愛機の爆音の
み耳に入る。機長が「針路〇度！」と指示した。
見事戦場脱出に成功したので。先程までの慌て方
が徐々に解消して行く。左右エンジンの音も同調
し「ワーン、ワーン」と唸る。馴れた耳にはこの
音がたまらなく楽しい。往きに岡本が心地良い眠
りに入ったのもそのためかも。塔整員野口が私の
ところへ来て「長沼兵曹、燃料がたりません。E
Cを使つて下さい」と言った。ECとは、燃料と

空気の混合比を適切であるかどうか知る計器で、
この目盛調整により燃料の節約ができる装置であ
る。

戦場脱出。燃料不足に苦しみながらも知覧飛行
場に帰還することができた。

司令岡村大佐に報告する。

「第二十七号、慶良間列島攻撃、只今帰りまし
た。〇五〇五、飛行場発信。〇五三〇敵戦闘
機らしきもの三機発見、雲中避待、〇七五〇
戦場到着、敵戦艦発見できず、止むなく桜花
機のみ投下」。

雑誌「丸」に、神雷桜花攻撃についての記事
が、次の如く記載されている。

「五月二十五日、九号作戦には、日本の桜花攻
撃は一機で、大型巡洋艦ルイスビルを大破し
たとある。この発表は米側のものである故、
間違いない確かなものであると信ずるもので

ある」

【解 説】

大東亜戦争の戦局、漸く我が軍に利あらずジリ貧の状態に陥っていったのは昭和十九年春であった。この劣勢を一挙に回復しなければならぬことは、軍上層部は勿論であつたろうが、現場の第一線飛行隊その心の中には溢れていた。

神雷部隊桜花作戦というものは、この時、その一員、大田正一少尉（偵察員）がグライダー爆弾の着想を、空伎廠長和田操中將のもとに申し上げたに始まると言います。

当初は廠長はじめ、技術担当首脳は、万に一つの生還の望めないものは兵器としては採用できぬと反対したという。これは「桜花」に限らず、特別攻撃隊の作戦においても、また、人間魚雷「回天」製作、採用についても当初は許しが得られなかった。また、真珠湾特攻の「特殊潜水艦」においても、生還を条件として作製されたのである。

しかし「桜花」には、「一番最初は自分が乗る」という、大田少尉の熱意と、戦争の推移とを考慮して、遂に試作に踏み切った、という経緯がある。

幾多の曲折を経た後、試作機を完成させ、母機は「一式陸攻」を改造したMZLに着装して、操縦性能を審査するため、長野飛行兵曹によって実験も完了させたという。もともと、この時は爆弾の代わりに水を満載、空中操作試験後、水を放出して見事着陸している。

これにより「桜花」隊員として、多くの飛行士（筆者である長沼兵曹の先輩や後輩）が隊員として教育をうけたのである。そして、隊員は、茨城県「神の池空」に集結し、一回の滑空着陸を経験して卒業となった由である。この実験飛行でも犠牲者が二、三人出たという。

このようにして、大田少尉発想なので、それまで丸大部品と称していたのを「桜花」と命名され、用兵、技術面で形を整える間にも、戦局は

益々我が軍に不利となつていった。まさに「桜花」は、攻勢の兵器として期待されていった。

昭和十九年十月、第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将は「桜花」作戦に先だつて、爆戦（爆弾を抱かせた戦闘機）による特攻を決意し、及川軍令部総長に了解を求めた。

総長は「戦局を考えると、涙を吞んで承諾せざるを得ないが、実行に当たつては飽く迄も、本人の自由意志を尊重して、決して命令して下さるな」と念を押したそうである。

戦史によつて知る如く、「十月中旬の台湾沖空中戦で、航空空中戦で、航空兵力はいたずらに消耗させてしまった。続いてフィリピン沖海戦で戦艦「武蔵」等主要艦艇が屠られ、我が軍は海上決戦能力を完全に失つてしまった。

しかし、神風特攻隊、爆戦九機が次々と敵艦に体当たりを決行、空母二隻撃沈、四隻撃沈の赫たる戦果を挙げた。

「神雷桜花特別攻撃隊」は、この頃、茨城県

「神の池基地」に、日本最大、最強の中攻隊を編成すると称して、第七二一航空隊を組織訓練をしていた。司令、岡村大佐、飛行長岩城少佐、飛行隊長長野少佐と一流の布陣であつた。

神雷とは「疾風迅雷」の音から出た部隊名で、岡村司令の発案であつたという。野中飛行隊長は、楠正成が用いたという「非理法権天」「南無八幡大菩薩」と大幟を指揮所に翻し、搭乗員整列を合図する陣太鼓をも持ち込んだ。

いろいろの紆余曲折の末、「神雷桜花攻撃隊」は昭和二十年一月、神雷第五航空艦隊（司令長官宇垣纏中将、参謀長横井俊行少将）に配属されたと言われたが、我々一下士官にはわからなかつた。

「桜花」は、何ら抵抗の無い空から投下できるなら成功もあろうが、制空権を握られている所では、敵の餌食になるのは当たり前である。戦死された方々には申し訳ないが、前後十回のこの作戦で成功を確認できたものが何機あるだろうか。

我が機は、米軍発表「ルイスビル大破」が、我々が生存しているから言えるが、後は、戦死のため未確認である。戦死したからと言い得ないのが、この作戦であった。

〔編注〕

長沼武治氏の手記(三)は第Ⅺ巻に掲載されております。

戦時国難に殉じた

若者の青春譜

愛媛県 寺田幸男

私は大正十五(一九二六)年十一月、愛媛県西条市に生まれました。昭和十八(一九四三)年西条農学校を卒業し、予科練を志願して松山海軍航空隊に入隊、甲飛第十三期生として卒業しました。昭和十九年には徳島海軍航空隊に転属、訓練

開始、昭和二十年五月ころより同期の戦友や多くの先輩達の特別攻撃隊の出撃を見送りました。そして復員後は、亡き戦友の特攻戦没者慰霊行事などを執り行い、現在は、全国徳七会副会長(徳島空出身)、愛媛特攻戦没者奉賛会副会長、西条市青少年健全育成協議会会長、などをしています。ここに、その当時の殉国の勇士たちの武士道を語るとともに、当時の若者が捧げた愛国の青春譜を綴りたいと思います。

若者が捧げた愛国の青春譜

私は、十七歳になったばかりの時に松山海軍航空隊第一期生に入りました。

私の行った予科練、甲飛では、かなり叩かれ、かなり気合いを入れられております。予科練に入って還ってくるまでに三四〇〜三五〇発、尻つぺたを叩かれております。それは海軍に行った人はよく分かると思います。ちょうど今の野球のバットと同じような棒が当たっております。ここ